

## 令和5年度学校努力点

### 1 テーマ

どの子ども「できる・楽しい」授業を目指して  
～自分の考えを表現し、かかわり高め合う学習の実現～

### 2 研究のねらい

人間形成の基盤となる小学校教育において、子どもたちに、より豊かな人間性を育むことが求められている。子どもたちの「主体的に生きる力」「他者とともに生きる力」の育成は喫緊の課題といえる。

本校では、これまで学校努力点における「クラス会議」や「SST」、「かかわり合いのある授業」などの実践を通して、安心して話し合う雰囲気が醸成されてきた。相手の意見を受け入れて自分たちで話し合っ解決したり、協力して決めたことを実行したりする姿も多く見られるようになった。しかし、昨年度までの授業中の子どもたちの様子や学力テストの結果からは、自分の考えをもつことができない姿や、平均正答率を下回る結果が見られた。

以上を踏まえ、今年度、本校の期待する子どもの姿は、「みんなで学び合い高め合う子ども」である。そのために、「できる・楽しい」授業の実現を土台として、授業力向上に取り組んでいく。子どもたちが深い学びに至るためには、まず「できる」状態をつくる必要がある。「できる」授業により、知識・技能を確実に習得させる。さらに知的に「楽しい」授業で、学びに向かう力や主体性を養い、主体的に学習できるようにする。ただ「楽しい」だけではなく「友達と力を合わせて学ぶとわかるからうれしい」「できた実感がある」といった思いを味わわせることで、粘り強く学習を進める姿勢を育てていきたい。

また、近年進む教職員の若年齢化に対応するため、授業力や専門性を伝承し、実践的指導力を蓄積する研究体制を構築していくことも必要である。そこで、名古屋市の授業づくりの重点である「なかまなビジョン」を共通基盤とした算数科の授業実践を行うことで、子どもの主体的・協働的な学びを促進させるとともに、子どもの成長に向けて教職員一丸となって授業改善を進め、主題に迫っていきたい。

### 3 本年度の取り組み（具体的な手立て）

#### 「なかまなビジョン」に示された学習過程のモデル

めあてをつかむ → 自分の考えをもつ → なかまと対話する → まとめる → 振り返る
--

それぞれの段階において、次に示すポイントを重点として取り組む。

#### ○ 「めあてをつかむ」段階

めあてを与えるだけでなく、子どもが自らめあてをつかむようにする。そのために、単元のゴールは明確に示す。そのゴールに向けて本時では「何ができれば・分かればいいのか」を意識させることで、問いを子どもから引き出せるようにする。

### ○ 「自分の考えをもつ」段階

一人ひとりの考えを引き出せるような、教材提示や発問を工夫する。また、対話を行う前に、個人で考えたり、書いたりする時間を十分に確保する。

### ○ 「なかまと対話する」段階

「何のために」「どのような手段で」対話するのかを子どもが明確に意識できるように、対話の目的と手順を明確に示す。また、抽出した子どもや教師が手本となってやってみせる「モデリング」を取り入れたり、学習ステップ（手順）や話形に関する提示を工夫したりすることを通して、抵抗感なく対話に参加できるようにする。

### ○ 「まとめる」段階

「navima」「Qubena」等のAIドリルや諸教材を活用し、適用・活用問題に取り組む。結果をもとに、めあてに対するまとめを子どもの言葉で整理する。

### ○ 「振り返る」段階

明確な振り返りの視点を与え、次の学びにつながる振り返りができるようにする。

「なかまなビジョン」の学習過程は、あくまで子どもの主体的・協働的な学びを促進する手段である。実践にあたっては、「なかまなビジョン」ありきで、ただ学習過程を形式的になぞるのではなく、子どもたちの実態や授業のねらい、内容等に応じてよりよい形に工夫することで、さらに子どもの主体的・協働的な学びを促進させられるようにしたい。

## 4 研究の方法について

### (1) 評価の方法

- 子どもの授業中の行動の記録や発言、振り返り用紙の記述等から読み取る。
- 年3回の「算数アンケート」を行い、変容を見取る。

### (2) 研究計画

- 各学級で年1回、算数科の授業研究を公開する。  
※ 専科担当教諭は教科を限定せず、主題に合わせて授業を公開する。
- 事前検討会を学年で行う。事後検討会を部会で行う。
- 実施時期ができるだけ重ならないよう、部会で計画する。  
1週間前を目処に授業日を教務に伝える。前日までに略案を職員の机上に配布する。
- 学校開放日や授業参観等の機会を生かし、努力点研究について保護者にも授業公開を行う。また、研究の様子を年2回、学年だより（7月号・12月号）で伝える。

### (3) 報告

年2回の報告会（中間・最終）を行い、子どもの変容や手立てについて話し合う機会を設けることで、日常の実践につなげるようにする。

## 5 研究組織

